

第2章. 藪牟田池の概要

2-1. 社会環境

2-1-1. 人口

藪牟田池流域内の人口は、昭和61年頃は28人だったが、令和5年では9人（6世帯）であり、約3分の1になっている。なお、平成17年以前の流域内の世帯数については不明である。

2-1-2. 施設利用等

「生態系保存資料館アクアタイム（写真2-1）」は、藪牟田池の形成過程や生態系を紹介する資料館である。平成11年4月に開業し、ここ3、4年は入館者数7,000人前後で推移しており、令和4年度の入館者数は8,947人である。

駐車場の近くには、貸しポートやレンタサイクルができる売店の他、水鳥とのふれあいの場、遊具広場等のアクティビティが整備されている。池の周囲には、自然散策やサイクリングが楽しめるサイクリングコースが整備されている。

「藪牟田池キャンプ場」は、近年のキャンプブームにより自家用車を利用したオートキャンプ客が多く、年間利用者数は約4,000名を越え増加傾向である（写真2-2）。



写真2-1 生態系保存資料館アクアタイム



写真2-2 オートキャンプ風景（12月）

藪牟田池では年間を通じて様々なイベントが催されている。各種イベント情報を表2-1に示す。

表2-1 藪牟田池の年間イベント

| イベント名 | 時期 | 備考 |
|-------------|-----------|--------------|
| いむた池梅マラソン | 例年2月 | 参加者数は例年約400人 |
| 桜の見頃 | 3月下旬～4月上旬 | 桜の本数約500本 |
| いむた池納涼花火大会 | 例年8月7日 | 近年はコロナにより中止 |
| 紅葉の見頃 | 11月中旬～下旬 | |
| 藪牟田池外輪山トレイル | 例年12月 | 参加者数は約300人 |

2-2. 自然環境

2-2-1. 法令の指定状況

法令等の指定状況を表 2-2 に示す。

表 2-2 法令等の指定状況

| 関係法令等 | 指定内容 |
|--------------|--------------------------------------|
| 文化財保護法 | 大正 10 年：「藺牟田池の泥炭形成植物群落」として国の天然記念物に指定 |
| 県立自然公園条例 | 昭和 28 年：藺牟田池県立自然公園に指定 |
| 種の保存法 | 平成 8 年：藺牟田池ベッコウトンボ生息地保護区に指定 |
| ラムサール条約 | 平成 17 年：ラムサール条約登録湿地に登録 |
| 藺牟田池自然公園施設条例 | 平成 18 年：釣った外来魚の再放流禁止 |

2-2-2. 藺牟田池の水質

薩摩川内市が実施した水質調査の概要を示す。

- ・池の水素イオン濃度は、昭和 54 年当時は pH5.8～pH5.9 の酸性が維持されていたが、近年 pH は 6.7～7.1 で中性の水質である。
- ・COD は 4.7～7.8 mg/L であり、泥炭の影響で COD 値が大きくなる傾向がみられる。
- ・SS は 1～2 mg/L、D0 は 7.5～11.7 mg/L で推移している。
- ・大腸菌群数は 7～920 MPN/100mL、大腸菌数は 3～26 CFU/100mL を示しており、概ね夏場に高い傾向がみられる。
- ・富栄養化の目安である全窒素は 0.1～0.27 mg/L、全リンは 0.01～0.019 mg/L であり、自然環境保全の環境基準をやや上回っている。
- ・植物プランクトンの指標である夏季クロロフィル a 濃度は 2～6 μg/L で、自然環境保全の環境基準をやや上回っている。

2-2-3. 藺牟田池の降水量と水位

藺牟田池雨量観測所（生態系保存資料館アクアタイム敷地内）で観測された、過去 5 年間（平成 30 年 4 月～令和 5 年 3 月）の平均降水量を藺牟田池の降水量とみなし、図 2-1 に示す。

年間の総降水量の平均は 2,816 mm である。月別で見ると降水量は春先から 7 月の梅雨時期にかけて増加し、夏から冬にかけて少なくなる傾向がある。

過去 9 年間（平成 27 年 5 月～令和 5 年 11 月）における月平均の最高水位は 143cm、最低水位は 37cm、平均水位は 85cm である（図 2-2）。令和 5 年は、7 月まで 100cm 前後と高い水位を保持していたが、8 月以降減少傾向である。

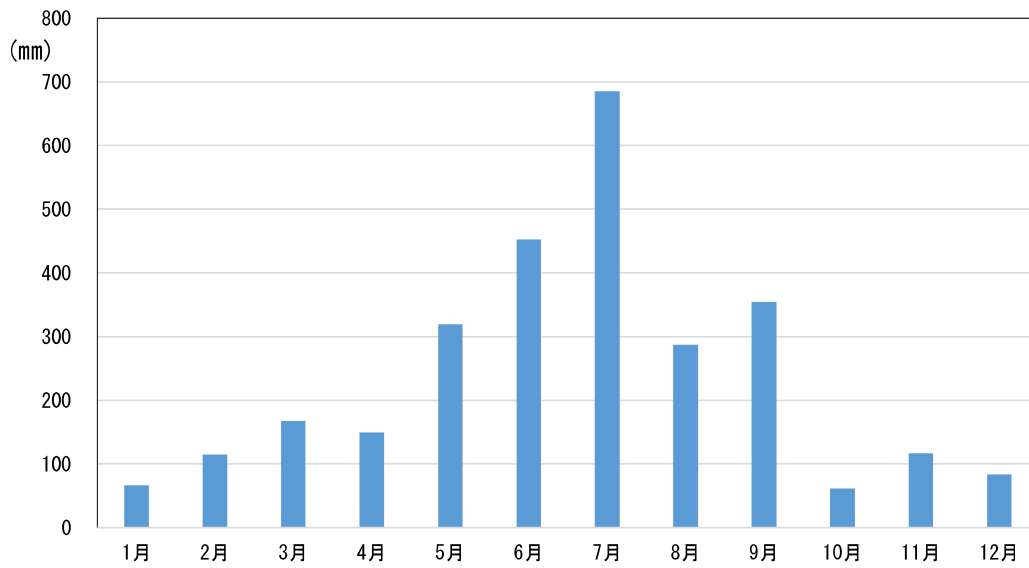


図 2-1 藺牟田池雨量観測所の降水量

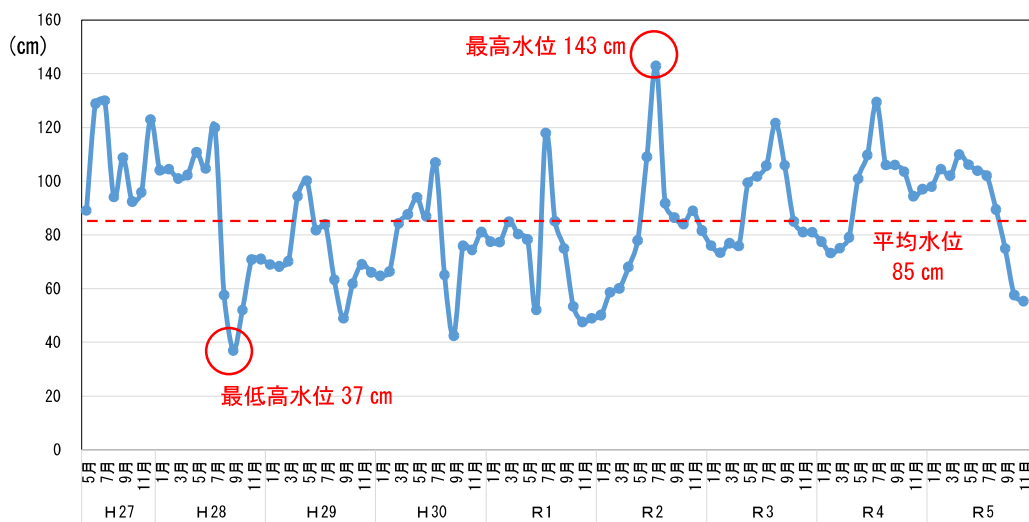


図 2-2 藺牟田池の平均水位

2-2-4. 動植物

1) 植物

藺牟田池には、ミズニラ、ミミカキグサ、ミカワタヌキモ等の重要な植物をはじめ、アンペライ、ヨシ、マコモ、カサスゲ等、泥炭の基となる抽水植物が生育している。一方、近年問題視されている外来種として、セイタカアワダチソウ、ヒメジョオン、オオバナイトタヌキモ等が多くみられる。

過年度報告書によると、経年的に藺牟田池内外の帰化植物（外来種）は増加傾向にあり、特に影響を受けやすい池内の帰化率は20%に達している。外来種は湿原の在来種と競合し、駆逐する恐れがあることから、今後の分布拡大によって重要な種を含む在来の植物に大きな被害を及ぼす可能性が懸念されている。

2) 動物

【小動物】藺牟田池は周辺の湿地を含め、アカハライモリ、ニホンヒキガエル、トノサマガエル等、両生類の重要な生息環境として利用されている。それらを餌とするアオダイショウやシマヘビ、ヤマカガシ等、爬虫類も多くみられる。また、藺牟田池は野鳥の渡来地として重要な地域であり、冬季にはマガモ、ヒドリガモ、オナガガモ等の冬鳥が飛来する。外来種であるコブハクチョウは令和5年、3羽まで減少している。哺乳類は、外輪山を含む丘陵地と藺牟田池を移動しながら、餌場として利用している。タヌキ、テン、アナグマ、イノシシ等の足跡や糞等の痕跡（フィールドサイン）が多くみられる。なお、周辺の茅場では重要種のカヤネズミが営巣している。

【魚類】魚類は、在来種はドジョウ、トウヨシノボリ類、ギンブナ等が生息し、移入種はオオクチバス、ブルーギル、カムルチー、コイ、ゲンゴロウブナ等がみられる。藺牟田池では主にオオクチバス及びブルーギル、カムルチーを対象とした外来魚回収ボックスを設置し、継続的な駆除活動が行われている。その他、指定管理者による自主事業として、外来魚の買い取りや漁具を用いた外来魚の駆除も行われており、近年外来魚回収ボックスの回収実績は増加傾向がみられる。

【昆虫類】藺牟田池の既往調査では、200種～400種の昆虫類の生息が確認されている。特にトンボ目の生息環境として重要視されており、重要種のベッコウトンボをはじめ、キイトンボ、オニヤンマ、マイコアカネ、チョウトンボ等、42種確認されている。ベッコウトンボは全国的に生息環境が減少しており、鹿児島県内の生息地も数箇所残されているのみである。また、水生のカメムシ目は重要種のエサキアメンボやコオイムシ等13種、水生のコウチュウ目は重要種のクロゲンゴロウやコガタノゲンゴロウ等14種確認されている。水生のカメムシ類及びコウチュウ類は、総じて農薬の使用等の水質汚染に弱く、さらに近年の乾田化により生息環境の減少が懸念されている。